

リポート  
**Report**

大磯町郷土資料館だより

1992・3・31

**4**

## もくじ

- |                   |   |
|-------------------|---|
| ◇古代の餘綾(4)         | 2 |
| ◇国府新宿寶積院所在の梵鐘について | 3 |
| ◇相模湾の魚と人と神        | 4 |
| ◇トピックス/行事案内/資料の受入 | 6 |



(館蔵品にみる)

## 古代の餘綾(4)

もたらされた土器② 一甲斐地方の土師器一

大磯町内において出土した、古代の搬入土師器のうち、畿内産および駿河東部産のものを、本シリーズの第1回目で紹介した。今回は馬場台遺跡で出土した、甲斐地方からもたらされた土器を紹介しよう。

奈良時代の半ばになると東国では、地方によってそれぞれ特徴のある土師器を生産し始める。相模国ではヘラケズリ整形の環やハケ・ナデ整形の甕を特徴とする相模器が流行するが、このような土師器に混ざって内面に放射状の暗文をもち、ロクロを使用して丁寧に作られた、橙褐色の土師器環がよく見受けられる。こういった土師器環は甲斐型環と呼ばれ、甲斐地方から持ち込まれたものである。

甲斐型環は、ロクロによって薄く丁寧に作られ、胎土に赤色の粒子を含むことを特徴としている。初期のものには箱形を呈し、外面をヨコミガキし、底部にまでミガキが及ぶことがある。内面は体部・見込部に放射状の暗文を施し、底部と体部の境に1条の沈線を施すものが多い。時期を経ると、箱形のものから、口径と底径の差が大きくなるものへと変化する。調整技法も外面に長いナメのケズリが施されるようになり、内面見込部の暗文が省略されるようになる。口縁部が玉縁状を呈するようになり、内面の暗文は一切省略される。このような変化を目安に、甲斐型環は8段階(甲斐Ⅴ期～Ⅷ期)に細分されている。環以外に相模国に搬入された甲斐型土器は、皿・蓋・小型甕・羽釜などがあるが、数えあげられるほど少量にすぎない。

馬場台遺跡16地点は、トレンチ方式による遺跡確認調査であったにもかかわらず、2m×4mの狭小な範囲から、破片を含めて4個体分の甲斐型環の出土を見た。1・2は底部の破片であるが、底径の広い箱形の器形を呈する。体部外面はヨコミガキ、内面は体部・見込部ともに放射状暗文を有する。1は分厚い底部を有し、底部外面にまでミガキが及び、焼成後の線刻「×」がある。2は内面底部・体部の境に1条の沈線を施す。1・2はそれぞれの特徴から、甲斐Ⅴ期に比定されるが、1は甲斐Ⅴ期にさかのぼり得る可能性を残す。甲斐Ⅶ期の環は、遠く奈良・平城京でも出土しており、実年代を探るカギとなっている。3は口径・底径の差が広がり、器形も小振りの環である。外面は体部に長いナメケズリを施し、底部は回転糸切り未調整である。内面は体部のみ放射状暗文を施し、底部・体部の境に1条の沈線を有する。甲斐Ⅶ期に比定されるものであろう。4は口縁部の小破片である。内面

東海大学文学部助手 田尾 誠 敏

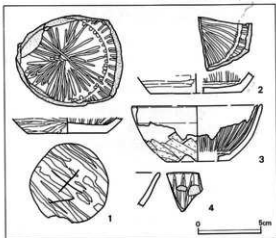


図1 馬場台遺跡16地点出土甲斐型環  
1・2は(大磯町教育委員会:1985)を再実測

に放射状暗文を施す。やや丸く反する口縁を持つ。甲斐Ⅶ期～Ⅷ期のいずれかに属するものであろう。

平塚市向原遺跡では、甲斐型環の初現期に当る甲斐Ⅴ期のものが出土しており、相模における甲斐型環の搬入はその頃に始まる。甲斐Ⅶ期以降になると、搬入される甲斐型環の数は爆発的に増加し、秦野市草山遺跡(曾屋高校)では、193軒の住居址の約12%に当る24軒の住居址から、実測可能であったものだけでも36個体の甲斐型環が出土している

このような甲斐型土器の相模国内での分布は、それ以前に搬入された駿東型甕の分布と近似している。こういった点からも甲斐型土器は、北回りの山沿いルートではなく、甲斐国から一旦駿河地方に南下し、海岸沿いの道筋で相模にもたらされたのであろう。馬場台遺跡出土の甲斐型環は、遺跡がそういった道筋に立地したことを物語っているのである。

### 引用文献

- 大磯町教育委員会 1985 『馬場台遺跡 第15・16地点における調査』  
坂本美夫ほか 1983 『甲斐地域』『シンポジウム奈良・平安時代の諸問題(神奈川考古14号)』  
田尾誠敏 1991 『甲斐型環の初相』『東海大学校地内遺跡調査団報告2』  
奈良市教育委員会 1990 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』

# 国府新宿寶積院所在の梵鐘について

立正大学 学生 成瀬 宏 之

大磯町内に現存する最古の梵鐘であり、作者・銘文等の点において注目される国府新宿の梵鐘について、以下、簡単な紹介を行ってみたい。

本梵鐘は、大磯町国府新宿451番地の真言宗寶積院境内西側隅に所在し、現在は国府新宿の区有となっている。明治維新までは、寶積院北方の六所神社の境内にあったが、維新後の廃仏毀釈により、この場所に移されたそうである。天保12(1841)年成立の江戸幕府官撰の地誌である『新編相模国風土記稿』六所明神社地図には、境内の南東隅に鐘樓が描かれている。

本梵鐘は銅鑄であり、総高130cm、最大幅(撞座部)72cm、最小幅42cm、最大厚(駒ノ爪部)6.8cm、最小厚(乳ノ間部)1.2cmである。撞座は複弁八葉の蓮華座であり、直径は12.6cmを測る。上帯には飛雲文、下帯には唐草文が施されており、乳ノ間には25(縦横5ずつ)×4(面)の合計100個の孔が付けられている。4面の池ノ間には、それぞれ銘文が除刻され、計346文字を数える。銘の全文は下記のとおりである。

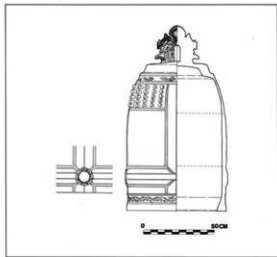
除刻された銘文「一打鐘聲」以下4句16字よりなる偈は『増一阿含経』より引いた一文、「放能」以下「鳴鐘」までの50字は、弘法大師空海が書いたものを弟子の真済が編した『性靈集』巻九より引いた一文である。(寶積院住職鈴木良一氏の御教示による)

また、銘文より本梵鐘の製作年代は寛永8(1631)年で、製作者(鑄物師)は、木村五郎右衛門(河内守)吉久であることがわかる。木村家は相模国愛甲郡荻野

に住し、代々鑄工を家業として、明和年間まで続いた名家である。吉久は寶積院の梵鐘以外に県内で2口を鑄造したことがわかっている。(坪井良平1989『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版社)

1口は、厚木市妻田の遍照院(妻田薬師)境内にある梵鐘で、寛永10年の銘をもつ。もう1口は、厚木市下荻野にある法界寺の梵鐘で、寛永14年初鑄のものであったが、現在は所在が不明となっている。

なお、梵鐘の調査は郷土資料館の依頼により平成4年2月28日に立正大学考古学研究室が行ったものを御厚意により使用させていただいたものである。



第1図 梵鐘実測図

## 銘文一

鐘辰  
本願 寛永八年中夏五為  
相島荻野之住 大工 木村五郎右衛門吉久

別當遍照王院 堂 後住聖真 敬 白

法印聖鏡

近藤六右衛門良重

池田三郎左衛門 池田理右衛門 池田長右衛門 政大 小嶋長右衛門

土塚玄番

社頭不朽 自在神力

天下泰平 國土安穩

風雨順時 五穀成實

万民豊樂 家門繁榮

秋山兵部良長

二宮 多田屋書

二宮五右衛門家次

二宮与兵衛

木皮与兵衛

山口若狭

片毛仁左衛門吉村

在張 西村徳右衛門 二宮莊

池田木右衛門家秀

奉勅有縁衆鑄造

後藤太郎左衛門重盛

石井惣左衛門

河内久兵衛門

妻島兵三郎 老母 夫母

江戶神田枝木町 金井主顯 秀定

相刻餘殘郡中六所大明神銅鐘

一打鐘聲當願念生脫三罪  
苦得果菩提故能野尼免刀  
輪極卒休機器長眼聞二而  
驚覺水夜回二而忽脫八部  
取以耕頃三意所以福深觀  
若二標道場二主只在鳴鐘  
乎乃至沙界依正身益而已  
當所生金指淨觀二子緣

## 相模湾の魚と人と神

### —シャチとシャチガメ—

昭和13年生まれ、私が10歳くらいの頃の記憶である。家の隣のお婆さんが、ミミズが陽にあたって乾いているのを見つけると、おまが小便をかけたのだから。バチがあたるから洗ってかえて来たという。私がいくら小便をかけないと言っても信用しない。そうしないと私のチンポコがハレて、小便ができなくなると教えてくれた。

夏になるとセミが鳴く。山にはカブトムシもいる。セミやカブトムシを捕るのが日課だった子供たちは、ウルシにかせる。どの子も同じであった。親たちは荒縄を持って山に行き、手頃な石をウルシの木にぶら下げる。ウルシの木をこらしめ、子供のウルシが早く治ったら石をはずしてやる。可哀相に夏になると裏山のウルシの木はいくつも石をぶら下げていた。ミミズにもウルシの木にも人間と同じように感情があり、善悪を知り、時には悪さもする。いわば人間と同等の扱いであった。

それは、木にも草にも、魚にも霊があり、人は自然界の霊と一緒に生活していた。日本人の自然に抱かれ自然と調和して生きていた生活の一端でもあろう。

小田原市の東端にある前川地区に大正の頃、波打際をただようクジラを巡って、地引網の権利を持つ8軒の網元の葛藤を、海岸によったクジラの権利を持たぬ釣職たちがヤユした次のような歌があった。

鯨（コジ）らせは

馬鹿な掛け合いだよ

8艘の舟は

己が権利を主張して

今日だ明日だと寄り合ひし

押切の浜へとぶちあげた

歌の意味は、シャチに追われたクジラが波打際で死んだ。地引網の権利を持っている8軒の網元は、それぞれ自分のものと今日も明日も寄り合ひして主張したが、話がこじれ、まともなうちに押切の浜へと押し上がったという、ひとつの事件を歌にしている。

土地の古老はシャチに追われたクジラは、最後には背を下にして内臓を守る。そこから、背に腹は変えられぬという言葉が出た。

前川浜で漁が盛んな頃、漁師たちはシャチをハモノと呼んで恐れていた。マグロ縄をあげてみると、せっかくかかった獲物はシャチに食われ、頭だけ残ってい

## 神奈川県文化財巡回調査員 石塚勝治

ることもあったという。

面白いのは、シャチに獲物をとられた時には、いくら悪口を言っても、シャチは悪さをしたのを知っているから良い。その代わりに、なにもしていないシャチを見た時には悪口を言ってはいけないという。かつて小田原の千度小路の漁師仲間では、シャチの前でシャチと呼ぶのは禁語だった。シャチが聞こえると怒るから、ダンナサマと呼んだという。正にシャチは海の主、ダンナサマだ。これは前川浜でも同じだった。

前川浜では次のようなことがあった。シャチを見つけた漁師が悪口を言った。するとシャチが離れず、舟に体当たりをするなどの悪さをしたという。乗り組んだ漁師たちは恐れ、悪口を言ったのを後悔した。年老いた漁師が舟の火床（舟につくられている簡単な煮炊き用のいろり）の灰をひとつかみとり、シャチに詫びながら海中にまいて、やっとなを逃れたという。

水揚げの少ない夏は、漁師はよく相模湾をカジキマグロを求めてアテン樺に出る。ゆきあたりばったりの漁である。カジキマグロに出会えばモリで突く。その日はカツオの本一本釣とあわせて漁をした。

帰り支度をしている時にシャチが舟につき、舟を下から持ち上げる悪さをした。船頭は釣ったカツオを5本ずつ束にして遠くへ放ってシャチの気をそちらに向け、何回もくり返ししながらやっとなへ帰ったという。

また、ある舟が面白半分シャチを突いた。すると土地の諺の「盛っている時は水が魚になり、落目になると魚が水になる」とおりになって、それまでの大漁続きから一変して、魚から見離されたという。いずれも前川浜の話である。

伊豆の大島では、魚が追われて群れになっているのをハモノツキと呼ぶ。ハモノは追っている魚のことでブリであったり、マグロ、シャチであったりする。前川浜では同じような状態をハモノマワシといい、ハモノと言えばシャチを指す。

ハモノは魔性あるいは精霊をもう。今では引退した押切浜の舟大工は、仕事を仕込まれた父より、「舟の柁には梶棒を押す穴が2つあるが、下の穴からのぞくと、ハモノの正体が見える」と教えられたという。この言葉から、ハモノは、通常の人間には見えず、舟大工のような特殊な人が、特別の見方をするると正体があらわれる精霊であろう。大島でいうハモノツキは、魚が狂乱状態になった異常さから、なにかが乗り移ったと見たのが最初の意味ではなかったろうか。

同じシャチのつくものにも、前川浜でウミヘビをシャチガメと呼ぶ。平塚の須賀では同じにシャチガメあるいはシャチガミという。岩手の海岸地帯ではシャチフクと呼ぶ。この三カ所では、いずれも拾った者に幸をもたらすとしている。シャチガミは幸の神、シャチフクは幸と福を授けるものであろう。

日本海側の出雲地方の漁村では、セグロウミヘビを竜蛇神様と呼び、12月の海荒れの季節に寄りついたのを捕え、出雲大社、佐太神社、日御崎神社などへ寄進する風習が今もあるという。

前川の椎野信吉氏は、昭和20年代にブリ定置網の大船頭をされておられた。初冬のある日、定置網の中を泳ぐ、陸のヘビに似たものを見つけ、すくいあげ持ち帰った。山の上人と呼んでいた行者にみてもらうとシャチガメと言い、縁起の良い珍しいものだと言われたという。樽の中で朝日を受け、頭部に後光があらわれたのは、今も忘れたいと語られた。大漁を祈って屋敷内に祠を建て、今もご神体として祀られている。椎野氏の長い漁生活の中で、ウミヘビに出会ったのは1度だけであり、80歳をすぎて、今も元気に沖へ出ている石塚与八氏も、今までに1度も出会ったことがないという。前川浜で、他には、昭和初期に沖でハモと間違えて陸のヘビと似たものをすくいあげ、驚いて捨てた話が1例ある。

小田原で長谷川釣具店を営むご主人は、昭和30年代に、1度に2尾海上でみつけ、持ち帰ったことがあったが、漁師の間で信仰対象になっているのは知らなかったと語られた。

また、二宮町の佐野信雄氏は、子供の頃父の船で沖へ行き、ウミヘビをみつけ「ヘビが泳いでいる」と驚いて父に伝えたところ、沖ではヘビとは言わず、ナガムシ、クチナワというのだと怒られたという。ナガムシ、クチナワは、いわゆる忌言葉である。

平塚の1例と前川浜の1例は、いずれも拾った漁師は名前を知らず、行者などに聞き、シャチガメと教示されたうえで信仰対象としている。平塚のもう1例は同船していた漁師がかつて大島で働いたことがあり、そこでシャチガミについて知っていたのが信仰への元となっている。他は気持悪いからと捨てたり、咬まれると毒ある嫌い、あるいは珍しいからと標本にしている例もあった。

いずれにしても、漁習俗が今よりもよく伝承されていた昭和20年代前後にあって、ウミヘビ信仰は漁師の間ではほとんど消えていて、行者などから教示されているところからみると、古い信仰形態かもしれない。



シャチガメ (マダラウミヘビ)・小田原市町屋

沖縄周辺から黒潮ののって、日本海側と太平洋側へ寄りつくウミヘビが、いずれも海に生きる人々に、崇敬されているのは、陸のヘビ神信仰との関わりもあろうが、陸のヘビよりもマレにしか出会わぬ珍しさ、ヘビのいないはずの海でみた時の驚き、身近な魚とのきわだつて異なる姿など寄神的な要素と、漁師の信仰する竜宮社の竜神と関係があらう。

シャチに戻る。大勢の漁師と舟を用いたクジラ漁は日本にも昔からあった。それより以前、あるいは多大な資金や労力のなかつた海付の村には、シャチに追われ、浜辺に押しあがつたクジライルカは、思いもかけぬ海の恵み、いやシャチの贈りものだったに違いない。

大きなクジラを襲い、舌を引きぬき、かつての漁舟より大きなシャチは、漁師にとって精霊のついた、前川の漁師のいうハモノ=強く魔性の動物であり、時にはクジラを贈ってくれる幸(サチ)の使者であろう。畏怖と恵みの二面性を持ったシャチに、昔から庶民が崇めた荒ぶる神の原型さえも思いうかべる。

#### 参考文献

- 柳田国男・倉田一郎 1979 『分類漁村語彙』国書刊行会  
谷川健一 1986 『神・人間・動物』平凡社  
平塚市博物館 1979 『平塚市須賀の民俗』

【表紙写真】

## 雛人形

大磯では、今でも1月遅れの4月に祝う家も多い。写真の人形は、町内(北下町)の西海誠氏から寄贈されたもの。江戸時代のものと思われる。

## 【トピックス】

### ◇郷土史講座

平成3年度の郷土史講座を2月15日(土)・22日(土)・29日(土)の3回にわたって実施しました。特に歴史講演会を兼ねた第1回目は、東海大学工学部助教授の稲葉和也氏を迎え、「大磯の住まいとくらし」をテーマに講演いただきました。稲葉氏は大磯町文化財専門委員、町史執筆委員、郷土資料館運営委員などを務められて



いる傍ら、昭和62年度より町内に残存する別荘、農家、町屋などの古民家緊急調査をお願いします。今回の講演は調査の成果を含めたきわめて興味深い内容となりました。なお2回目は鈴木昇当館長による大磯宿の話、3回目は國見徹当館学芸員により、大磯町における近年の埋蔵文化財発掘調査の成果報告がありました。

### 【行事案内】

平成4年度の年間行事(予定)です。みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。館へ直接お問い合わせください。

### ▼展示

夏季企画展『なつかしの風景Ⅱ～家と町並み～』  
7月26日(日)～9月6日(日)

秋季特別展『(仮称)相模湾の動物』  
10月10日(土)～11月15日(日)  
記念講演会 10月25日(日)

冬季企画展『最新出土品展』  
平成5年3月2日(火)～4月4日(日)

### ▼自然観察会 (小学生以下 30名)

5月、7月、9月、12月、2月  
1回目は5月17日(日)午前9時～午後3時。野性蘭とツツジに集まるアゲハチョウを観察します。弁当と筆記用具を持参、ハイキングの服装で。

### ▼子ども歴史教室 (小学5年～中学2年 30名)

テーマ「昔話と伝説～おばけと妖怪を考える～」  
8月3日(日) おばけと妖怪の話  
4日(火) 金太郎伝説をさぐる  
(南足柄市郷土資料館の見学)

### ◇ワラゾウリと巣箱

3月7日(土)および8日(日)、民俗部門と自然部門の実習講座が行なわれました。ワラゾウリづくりには、町内西久保在住の松本安太郎氏と虫塚在住の土方策業氏のお2人に、また巣箱づくりには西小磯在住の中山和也氏にそれぞれ指導をお願いしました。完成した巣箱は、資料館周辺の木々に取り付けました。真新しい巣箱は、まだ周囲の景観になじんではいませんが、早く鳥たちが住みかとしてくれることを待ち望んでいます。



### ▼民俗実習講座

(10名)

9月12日(土)  
ワラゾウリ(ハナムスビゾウリ)をつくり、大磯の伝統技術を習得します。

### ▼郷土史講座

(40名)

平成5年2月13日(土)・20日(土)・27日(土)  
郷土の歴史を学ぶ3回の講座。考古、歴史、民俗と多彩な内容を企画します。

### 【資料の受入】

(寄贈) ご協力ありがとうございました。

生 沢 二宮威次氏 トアオリ他  
大 磯 木村徳兵衛氏 日の丸(寄書き)  
大 磯 木村澄江氏 雛人形他

(移管)

大磯町役場企画課 文久水寶  
大磯町役場住民福祉課 釜他

Report—大磯町郷土資料館だより— No.4

平成4年3月31日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL 0463 (61) 4700

FAX 0463 (61) 4660